

茅 風

— Breeze from the field of thatch-grass —



2010年7月16日

森林塾青水

事務局便り

茅風通信 31 号



□4～6月の活動報告とトピックスあれこれ（事務局）…… 1

◆麗澤中「樹木観察会」実施報告（草野洋）

◆東京学習会「万葉集に詠まれたススキ」開催報告（稲貴夫）

■特集：山の口開けと野焼き …………… 3

○野焼きー火がもたらすもの（尾島キヨ子）

○山焼きの火は 大きいなあ 赤いなあ（上平隆憲）

○コモンズ藤原の野焼きに参加して（高橋秀典）

○雪原の野焼き（永野貴裕）

○森林塾スタッフとして参加した野焼き（吉野一幸）

■古道・芦ノ田峠のフットパス地図づくり…………… 7

○芦ノ田峠フットパスのポイント（海老沢秀夫）

○芦ノ田フットパスの設定調査（有馬靖賀）

◆会員・会友コーナー：『古民家再生奮闘記』③（北山郁人）… 8

□編集後記～塾長のつぶやき～ …………… 10

◆参加者募集のご案内（事務局）…………… 11

○東京学習会「流域市民が支える利根川水源の草原」

○森林塾青水 10 周年記念フォーラム

■ 4～6 月の活動報告とトピックスあれこれ

事務局

●4月25日： 前日雪で順延した野焼きが7年連続無事故で終了しました（写真、上）。参加者は降雪による順延という悪条件にもかかわらず、2日間延べ150人でした。それもこれも、事前の準備から当日の後片づけまでご指導ご協力をいただきました地元ならびに町役場、町田工業さんはじめ大勢の皆さまのお陰さまでです。ありがとうございました。

また、今年は嬉しいことがたくさんありました。84歳の吉野かつみさんが娘さんや5人のひ孫さんとともにご来場、正に老壮青幼4代がススキ草原に入り会うほほ笑ましい光景が見られました。また、地元民宿・ホテルの2代目3名が参加、当塾学生会員6名も草原デビューするなど、次代を担う若者たちが仲間入りしてくれました。そして、流域志援（協賛）企業の方々が6人も激励にかけつけて下さいました。などなど、いずれも思いもかけない嬉しいことでした。塾生一同この場を借りて、厚くお礼申上げる次第です。

●5月15日～16日と6月19日～20日：講座「コモンズ村・ふじわら」で2回にわたり、上ノ原の生き物調べ・侵入木の除伐と芦ノ田峠のフットパス地図づくり。峠道をご案内いただいた林親男さん（藤原案内人クラブ代表）、芦ノ田の昔話や植生など教えていただいた吉野仍次さん（集古館館長）ありがとうございました。

●5月23日：麗澤中1年生対象の「樹木観察会」のお手伝い。（2頁、草野レポートご参照）

●5月30日：今年第1回目の東京学習会「大好きな万葉集のススキに思う」（岡田伊佐子講師）。岡田さん、入念なご準備と膨大な資料のご提供大変ありがとうございました。（3頁、稲レポートご参照）

●6月15日～16日：葉留日野山荘・高橋泉さんのご要請

を受け、群馬県グリーンツーリズムサポーター研修会のご一行15名を上ノ原、青木沢峠フットパスと藤原の各集落にご案内しました（写真、下）。（北山、清水）

○トピックスあれこれ

・環境省・経済産業省が推進しているグリーン家電・住宅エコポイント事業の環境寄付対象団体に当塾が採択されました。（5月21日、8頁ご参照）

・林野庁が野焼きの安全なやり方を調査しているということで、当塾が地元・町役場のご指導のもと行ってきた野焼きの安全なやり方につきヒアリングを受けました。（6月23日、日本林業振興会にて浅川対応）

・国土交通省「国土の国民的経営」実践ガイドブックに当塾の活動が紹介されました。「市民団体による草地の保全・再生活動を通じた中山間地の活性化」の事例でした。（詳しくは当塾ホームページご覧下さい）

・三井昭二著「森林社会学への道」の第1部4章「入会林野の歴史的意義とコモンズの再生」に当塾の取り組みが紹介されました。（内容を知りたい方は当塾ホームページでご覧いただけます）



5月22日(土)千葉県にあるR学園中学部1年生167名が樹木観察会を行い、そのお手伝いをしました。

今回の樹木観察会は7月に予定されている群馬県みなかみ町の「奥利根水源の森林」および上ノ原で行うフィールドワークへ向けての事前学習として位置付けられ、学園キャンパス内で自然・樹木観察の視点や方法を学ぶものです。その目的は「樹木のような特徴を理解し、奥利根でのフィールドワークに活用する」としています。

この観察会は、N大学生物資源科学部の学生40人が事前調査から本番までを企画・実行、森林塾青水はYさんを筆頭に、S塾長、Oさん、Mさん、それに小生、Yさんの仲間である森林インストラクターSさんとYさんの8人がアドバイザーとして当日の観察会に就きました。

観察会は生徒4クラス(A～D)の1クラスを1班10名ぐらいの4班に分けて16班で編成され、学生が各班2名、青水スタッフが各クラスに2名就きました。

生徒全員と指導者の学生、青水の顔合わせの後、各班はそれぞれコモンホールで「葉っぱ」を使った導入部から観察会が始まりました。



ここでは、8種類(ソメイヨシノ、クスノキ、ニッケイ、ヒイラギナンテン、カリン、イチヨウ、ユズリハ、イロハモミジ)の葉を使って、「これを同じ仲間と思うものにグループ分けしてみましょう」と呼びかける。指導者側のねらいとしては形、大きさ、葉脈、臭いなどの共通点と違いを発見し分けてくれればその後の展開である樹木を見る目を養うにつながる「つかみ」の部分と位置付けています。しかし、子供たちは、「葉っぱ」をあれこれ弄り回すがグループ分けに関心はない様子、はじめから観察のポイントを教えればそれなりの答えが出るのであろうが、子供たちが自主的に発見してくれることがなによりである。ざわざわした雰囲気の中、学生からの「この葉っぱを見てどう思う？」との呼びかき、生徒たちから出た回答は、「きもい」「かわいい」「おしゃれ」!! いかにも今時の子供?だが、これに対する突っ込みは用意されていなかったようで、そばで聞いていた私は「惜しい」とつぶやいてしまった。子供たちが発した何気ない言葉に「何が?どこが?なぜ?」と突っ込みを入れ、直観的な感想から「違いや、同じところ」が引き出せたかもしれない。

共通点や違いでなく、なんとなく分けられた葉を前に、ユズリハの名前の由来、クスノキの3行葉脈や匂い、ニッケイから作られる香辛料シナモンのこと、イロハモミジの形

を説明するが反応はいまひとつ。時間をもてあました学生からアドバイスを求められ、生徒たちの顔を見ながらクスノキには「ダニ部屋」がありダニを飼っている(共生関係?)ことや葉っぱを破り香りを嗅がせてみる。また、ニッケイをちぎり一人の生徒にかじらせると顔をしかめて大げさな反応、「不思議な味でしょう」と振ると、他の生徒たちも恐る恐るかじり始めた。

その後、キャンパスに出て、10種類の樹木を見て回りながら光合成のしくみ、気孔の役割、葉を包んだビニール袋に水がたまっている様子を見せて、植物が蒸散していることを実際に分らせる、根と幹と葉の役割などを説明しながらメモを取る野外学習が進んでいく。

この日は直射日光が強く気温が高い夏日となって生徒達はバテ気味。

それに、途中、ブナの前でクラス単位で共通の話をするため各クラスが集中したこともあって、時間配分が予定通りいかず何度かの待ち時間ができ、他のグループと遭遇する、するとそこでまたはしゃぐなど生徒達の集中力が途切れる。特に女の子達は観察会そのものに興味がないようで引き気味なのはこの年頃によくあるテレなのか。樹木の葉の付き方や、木肌の違い、根と幹と葉の関係などにはあまり関心なく、ヤマモモの雌の木と雄の木の話などには喰いついてくる、また、光合成や蒸散についてはあらかじめ知識があるのか的確な答えが返ってくるところをみるといわゆる勉強には強い。

暑い中、休憩の時間、木陰に入れて「なぜ木陰が涼しいか」打ち水効果を例えに蒸散によって気化熱で涼しくなること、木の中の水と大気の水の循環の説明をしてみる。また、光合成を行う葉っぱはでんぷん工場でもあり、酸素製造工場でもあるなどを説明するがむづかしいことをやさしく、やさしいことをわかりやすく説明することが、いかに大変かを思い知ってしまう。

さて、野外での観察会を終わり昼食の後には、クラスごとのまとめの時間である。

ここでは、観察した樹木のうちのブナ、クロマツ、ヤマモモ、アオキについて同じところ、違うところ

をまず個人ごとにまとめ次に班ごとにまとめて発表する。

様々な答えが活発に出ていたが指導者側の狙いである特徴の違いなどはあまり出てこず、光合成をする、蒸散をしている、二酸化炭素を吸っている、酸素を出すなどいわゆるお勉強の答えが多い。しかし、その中に、「木は根を持っている」「動かない」など予想しなかった回答があって驚く。

生徒達が理論的に考えたわけではないだろうが、樹木がなぜ光合成や蒸散をするのかに素朴な疑問を持ちそれに対する漠然とした答ではないだろうかと、好意的に捉えることもできる。

だからこそ樹木は種子の散布や自分を保持するために、様々な知恵を駆使している。樹木の不思議さ、森の不思議さ、自然の不思議さにつながっていくのではないだろうか。

これについては、まとめの中で触れておいたが7月の奥利根で更に興味を持って体験学習してくれることに期待がもてます。

この樹木観察会の反省すべき点は導入部のもち方、樹木観察の動線をよく考えること、事前打ち合わせ・下見など技法の面で改善することもあるが、まず、生徒達に学習の一環であることをわからせるため、場合によっては厳しい態度をとっていいのではないかと感じました。この日、学生たちはイラストを用意して紙芝居風に解説するなど工夫を凝らし熱心に指導しているのを見て若者たちも「なかなかやるわい」と思った一日でした。

◆第1回「東京学習会」開催報告

稲 貴夫

本年度最初の東京学習会を、5月30日(日)午前十時より中央区湊の「女性センターブーケ21」で、会員、一般含め14名参加のもとに開催しました。この日のテーマは「大好きな万葉集のススキに思う」で、講師は岡田伊佐子幹事です。

子どもの頃、柿本人麻呂ゆかりの兵庫県・明石で、百人一首などにも親しみながら育った岡田幹事は、人麻呂の作といわれる和歌「ほのぼのと あかしの浦の 朝ぎりに 島がくれゆく 舟をしぞ思ふ」が、いつも見ている瀬戸内海の風景そのままであることに気付いたことがきっかけで、人麻呂や万葉集の世界に自然に魅せられていったといえます。

約四千五百首の和歌がおさめられた『万葉集』は植物の宝庫でもあり、青水と馴染みの深いススキの登場する歌も、全部で71首にのぼるとのことです。岡田さんはその全てを転載した資料を準備下さりお話し下さいました。そのすべてを紹介することはできませんが、特に岡田さんが思いを込めて解説して下さいった次の歌を紹介します。

道のべの尾花が下の思ひ草 今さらなにぞ物か思はむ(2270)

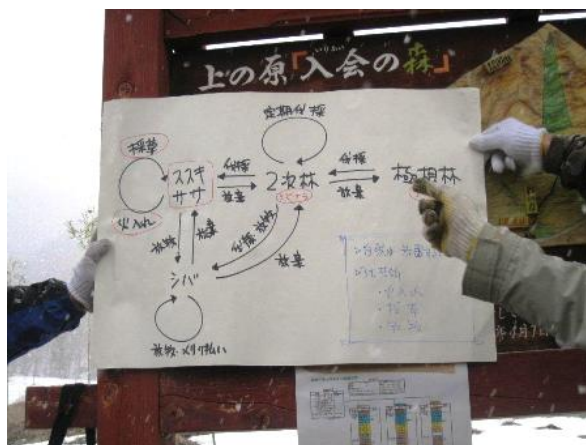
上ノ原のススキ草原では、茅刈の季節を迎えるとススキの下からナンバンギセルが顔を見せます。ナンバンギセルはススキの根元で生育する寄生植物ですが、この歌は、ススキ(尾花)とナンバンギセル(思ひ草)が一緒に登場する万葉集唯一の歌とのこと。万葉集とススキを題材に参加者とやり取りしながら、文字通りの学習会となりました。

また、岡田幹事の後をうけて、清水塾長より青水の今年の活動について報告があると同時に、5月14日の日本経済新聞の文化欄に掲載された木下武司氏の「万葉集は実用植物大全」という解説記事も紹介いただきました。植物や生態からみた万葉集の面白さについて楽しく学びつつ、あっという間に予定の時間が過ぎ去りました。



■特集：山の口開けと野焼き

4月24日。今年の「山の口開け」は思いもかけぬ雪に見舞われた。林實治さんの先導で、肅々と、今年の安全と実りを十二神様にお祈りしました。つづいて、海老沢講師による「野焼き」講座。(写真、下) あけて25日は、十二神様が大量の真面目な参加者に快晴無風の野焼き日和をプレゼントしてくれました。(編集子)



◆野焼きー火がもたらすもの

尾島キヨ子

今回で2度目の野焼きを体験された尾島さん。そして、多摩地区をはじめ、あっちこちの森林保全活動にも参画されているベテラン・ボランティア(?!)のご感想です。(編集子)

二度目の野焼きは様子が大体想像でき、知った顔も増えて来て懐かしい場所に行く感覚も生まれて来ました。東京が葉桜、みなかみ駅の辺りは満開、そして道路以外は雪も多く残る上ノ原は蕾と、移動につれ変化する桜の様子が遠くに來た事を感じさせてくれます。天気予報では雨など降らないはずだったのに上毛高原から現地に向かう途中で時々雨がばらつき、現地到着時には山の斜面に薄っすらとガスがかかっていました。非常に寒く、現場に焚き火があったのはとても嬉しいものでした。怪しい天気は本格的な雪になり、『山の口開け』の神事の時には50名余の参加者は頭や肩に雪を積もらせながら凍えていました。雪は断続的に降り続き、昼食時には幸い晴れ間も見えたものの、予定されていた野焼きは無理と判断して次の日の実施となりました。

6時に起きて硬雪を踏みふきのとうを取りに。田んぼの霜柱は5センチ程に伸び、ふきのとうは凍っていました。摘んで帰ったら黒くなってしまいかもと思いながらも摘みました。帰宅後、黒くなっている部分もあったので取ってふき味噌にしました。それにしても、生きていれば凍っても元に戻るのに摘んでしまうと元に戻らないのは何故でしょう。命があるということはすごい事なのだと感じました。

翌日、念願の天気になり少しでも茅場が乾燥する時間をと、野焼き開始まで除伐をしました。場所が違う所為もありますが、去年は径10センチもの太い木もあったのですが、今回は殆どがウツギで作業は楽でした。野焼き講習会后、夫々の現場へ。私達はゴルフ場隣の初めて野焼きをする場所に登り、ジェットシューター隊の到着を待って着火。原則は上から下に向かって焼くのですが、茅が湿って燃え難い時は逆でも良いとのこと。ジェットシューター、スコップ、杉葉の消火隊は夫々雪山の防火帯の上などに控えていましたが、火は雪の防火帯で止まり殆ど出番はありませんでした。それでも火がじわじわと迫って来るのを待っていると、時として熱を帯びた強い風が吹きつけ今年も起きた事故を想像して恐怖を感じました。白い雪の防火帯に隔てられて黒く変わった斜面が広がり野焼きは終わりました。遠目には黒く見えてもほんの表面だけしか燃えていない茅を踏みながら下りました。

スライドで防火帯の雪の下だった野焼き未実施場所と実施場所の茅吹きに歴然とした違いがあるのを見て、野焼きだけの要因ではないにしてもその効果を実感しました。前回や今回のように表面だけが燃えて枯れた茅が残っている場合と乾燥が進んで地表面の茅が全て燃えてしまうような場合では結果にどんな違いがあるのでしょうか。また、それは是なののでしょうか？

火を前にして後に下がったらそこにも火があつて肝を冷やしました。バックする時は後を確認した方が良く、火を点ける時、または誰かの後ろに火がある時は声を掛けなければと思いました。

秋には茅刈りをするわけですが、こうして手を入れた茅が実際に屋根葺きに使われ、更に今、マルチ材や肥料としてのルートを開拓しています。最初に青水に出会った時に“茅場を大切に”＝“茅を実際に使う(茅を経済ルートに乗せる)”という活動に遊びだけではないNPOとして本物との思いを持ちました。自分が多少関わった事が役に立つ事、人の輪が繋がる事、知識が増える事にも喜びを感じます。



◆山焼きの火は 大きいな 赤いな

上平隆憲

上平さんのご出身地の奥飛騨地方では、「野焼き」ではなく「山焼き」と言ったそうです。昭和20年代、小学生時代の山焼き体験を思い出しながらのご感想文です。(編集子)



念願の野焼き(飛騨では山焼きと言いました)を体験できました。有難うございました。

昭和20年代に村で体験して以来、60年ぶりの山焼きでした。その時は友人の兄の中学生と小学生の友人と私の3人で、下から山の南一面を焼き尽くしたものでした。毎年夏草刈りをしている草原でしたが、山の上部に雪が少し残っているだけで、他に何の防火準備もない単純なものでした。よくも中学生に山焼きを任せたものだと思います。整備された草地在がちゃんと残っていたことと、またそれだけ世の中が大らかだったからなのでしょう。冒頭のものは、小学三年生の俳句を作る授業があった時、山焼きの感動を詠んだ、生まれた初めてのハイクです。

時代が変わって、草地も無くなった今は、安全・防火の重要性が飛躍的に高まっています。それだけに未経験の市町村は、山焼きの再現などは、なるべく認可したくないという姿勢もあるやに思われます。それだけに、今日の組織だった山焼きは、事前の雪かき、役所と森林組合との連携、草起こし、伐採の小道具／消化具等々、新時代の必須準備事項が具体的に見聞体験できたことは嬉しいことでした。改めて感謝申し上げます。

残念ながら、「ワラビ粉再興のための山焼きの再開」という私共の目標については、私の早とちりがあり、今回は飛騨の村からの参加者はありませんでしたが、それでも尚、貴重な体験であったことは変わらず、今後も「ワラビ粉」の復活に繋がる路を探して行きたいと思います。

今回のフットパスは、それこそ7月に我が村、飛騨山野村高原へ、森林塾から遠路のお出ましを頂けるメインテーマです。その予備演習ともなりますので、参加させていただきます。改めて申し込みます。なお、その時はルートにGPSによって軌跡記録するGPSのGARMIN端末を持参するつもりです。

きょうの帰途は、水上駅から13時54分発の列車に乗ろうとして挨拶もそこそこに出てしまい、後片付けを手伝わなかった非礼をお許しください。列車には原さん、逸見さん、関根さんと私の4人が語り合いながら、私の場合は予定より早く5時半に帰宅できました。

ジパング利用のせいもあり、交通費が府中から往復で4100円と前回の9740円の半分以下になりました。10時半到着であれば、新幹線ではなく、在来線のJR水上駅を利用すれば、このぐらい安く往復できるというのは列車で行く人には助けになるかと思います。参考までに。

◆コモンズ藤原の野焼きに参加して

高橋秀典(レイクウオーク代表)

カヌーのツアーを主催し、地域の自然を守り育むエコプロジェクトに取り組み中の高橋。野焼き初体験の記です。(編集子)



四月二四日土曜日は、私にとって、きっと大きな意味を持つ日となりました。

集まったのは総勢約五十名。森林塾青水のみなさん、地元みなかみ・藤原地区のみなさんや役場のみなさん、そして学生のみなさんや遠く首都圏からお越しのみなさん。多岐にわたる年齢も立場も様々な方々が、藤原の野焼きという同じ目的をもったみなさんが一同に会されました。

残念ながら、当日は雪交じり。みんな寒いにも関わらず、これだけの人が集まり、そして青水代表の清水さんを筆頭に、みなさん素敵な笑顔でいられたのがとても印象的でした。自然を愛する人達は、どんな状況でも自然の中では笑顔でいられるのだなと感じました。

野焼きの意味や方法などを学び、明日に備え一日目は終了。

迎えた二日目。昨日の天気が嘘のような快晴。一同野焼きの準備中どうしてもこの残雪の山々の美しさに目を奪われてしまいます。写真を撮ったり、「いいねえ」と何度も言わせてしまうそんな景色が広がり、自然と感謝の気持ちがかわいてきます。

火の動きと注意事項、消し方の説明を受けて、いよいよ火入れ作業開始。山に火をつけるその作業は私にとっては初の試み。自然とワクワクしながらもちょっと心配にも。昨日雪が降ったせいもあって、瞬間に火が広がるといったことはありませんでしたが、その火の広がり方、そして風の変化は自然のすごさを改めて感じさせてくれました。

私は、ここみなかみで自然の恩恵に与り、カヌーのツアーを開催しています。昨年より、ここみなかみの自然を守り育む活動をということで、エコプロジェクトという名の下、地域の植樹育樹活動への参加や、協賛金や寄付金などの活動を始めました。これからも、持続的にここの自然を育んでいくそんな活動のお手伝いをしていきたいとさらに強く感じました。まずは、自分達で体験してみること、そして色んな活動をされている方のお話を聞かせていただくこと。

今回お世話になりました森林塾青水のみなさんはもとより、関係各所参加していただいた皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。まだ第一歩を踏み出したばかりの私の活動ですが、よろしく願いいたします。そして、ここみなかみの自然にも改めて感謝いたします。

◆雪原の野焼き！

永野貴裕(学生部)

4月に発足した当塾「学生部」年長組(!)の永野さん。大学院では生物資源科学部に籍をおく永野さんが語る上ノ原フィールドの魅力とは・・・。(編集子)

昨年の6月、初めて上ノ原フィールドへ訪れました。1年ぶり2回目の上ノ原は一面の雪景色となり、雪とは無縁な地元との違いを改めて感じました。以前に来た時は初夏ということもあり、豪雪地域と聞いてもピンと来なかった部分もありましたが、今回4月に来てもまだ雪が残っている様を見て、さらに吹雪の中作業を行ったことで実感しました(笑)。また話に聞いていた雪を防火帯に用いた野焼きを実際に見ることができ、この地域ならではの風景なのだと興味深く思いました。

前回参加した時は出来なかった除伐作業にも参加することができ、切るだけでなく切った後に外へ出す作業が大変であることを体感しました。樹木が大きくなってしまっただけでは切り倒すことができて運ぶことは難しく、今の時点で除伐することが肝要であることが良くわかりました。

今回最も印象に残ったのは無理のない野焼きというポイントです。今まで見てきたところではどちらかと言うと天候に左右されつつ、焦りを抱えて行っている印象があったのですが、こちらではそのような雰囲気を感じられませんでした。無理はせず、出来るタイミングで出来る範囲のことを行うという姿勢がとても新鮮に感じました。継続する上で何より大事なものは「無理をしない、ダメなときはダメ」とある程度諦めを持って臨むことなのかも知れない、そんな風に思いました。

野焼きで焼かれたところが春、夏、秋とどのように変わっていくのか楽しみです。ぜひ一年を通してフィールドへ通いたいと思います！植物、蝶類、鳥類、哺乳類とこれからもまだまだみなかみの魅力は尽きません！



雪原の中の野焼き！白の中に赤い炎が映えますね！

地元会員の一幸さん。おばさんの上ノ原の昔の思い出話や、初めて野焼きを目の当たりにしたおばあちゃん（84歳）のご感想などをご披露いただきました。（編集部）



左から2番目：かつみ おばあちゃん

今年も7回目の上の原の野焼きが無事終わり、少しホッとしております。また、いつも私は民宿組合スタッフとして見学させて頂いていましたが、今年は組合の手伝いは任せて森林塾青水として参加いたしました。

最初に今回の野焼きで森林塾として今の自分に来る事ってなんだろう？と考え、思いついたのは、私が思っているよりも地元で野焼きを知っている人が少なく、とりあえず出来る範囲で藤原の人に多くこの事を知って貰おうと思いました。毎年写真を撮ったりして家族に見せたりしていましたが、今年は家族や知人に迫力ある野焼きと上の原から見える風景を生で見せたいと思い、前もって連絡をしてみました。

4月24日野焼き当日は下の方では桜と言うのに雪が吹雪いていたりして野焼きは25日の予備日に延期となりました。予備日は心配していた天候も良くなり、おばあちゃんや孫、曾孫まで行ってみたいと言う事で、大阪に嫁いだおばさんも、たまたま藤原に帰って来ていて、じゃあみんなで行ってみようと言う事になりました。

大阪のおばさんは若い頃に、よくこの上の原に来て散歩していたそうで、懐かしみながら昔の上の原を話してくれました「今はゴルフ場の所が昔は草原の中に季節の花が群生していてカップルのデートスポットだったんだよ。上の原はその頃の若い人の憧れの場所でおばさんも若かりし頃は・・・と嬉しそうに言っていました。また今回は来られませんでしたが大阪のおばさんの姉に昭和村のおばさん（きよみちゃん）も子供の時から藤原に住んでいまして、きよみちゃんも上の原が大好きでした。きよみちゃんは、どちらかと言えば花より団子と言うのも少し失礼ですが、上の原の山菜が好きで、よくリュックを背負って出かけていました。私も小学生位の時に上の原に連れて行ってもらいました。きよみちゃんは山菜をどんどん採ろうと奥に行つて見えなくなり、私

が迷子になって泣きべそをかいている所にたくさん山菜を持って現れて一緒に帰った思い出もあります。

そんな中、おばさん姉妹のお母さんである かつみ おばあちゃんは実は84年間一度も上の原に来た事が無かったと言う事で本当か嘘かは分かりませんが、みんな驚いていました。家に帰ってからは良い景色だったねと満足気でした。

それと今年から私の藤原小中学校の同級生の真人君が藤原に帰って来まして、自宅がロッジ「とんち」と言う事で本格的に家業を手伝うそうです。今回の野焼きにも応援に駆けつけてきて頂きました。私達が小学校の頃は遠足で上の原を歩いて遊んだりお弁当を食べたりして利用していました。またその時、真人君が近くに置いてあったオートバイを弄っていて倒して持ち主に怒られ、泣いていたのも良く覚えています。最近の藤原小学校では遠足等ではバスに乗って遊園地や博物館に行ったりしていますが、私の娘が藤原小学校に通っている事もあり、将来子供達がこういった地元の思い出を思い出し欲しいので、上の原を遠足のコースとして使って貰いたいなあとと思っています。

最後にですが、昔は上の原草原は今の草原の面積の何倍もありました。しかし20年前辺りからゴルフ場ができたり、茅葺き屋根の家が減ってきて茅を育てる必要がなくなってしまったのを主な原因として徐々に草原が減ってきています。放っておくと普通の森になってしまいうそうです。定期的に野焼きや木を切ったりしないと、この茅草原は維持できない事を森林塾から教えていただきました。

この多くの人の思い出の詰まった茅草原を維持して、自然の中での体験を、これからの子供達やその子供達にずっと伝えて行ければ・・・と思います。

今回は民宿のプランとして野焼きツアーを出していましたが、残念ながら今年は参加者が居ませんでした。徐々に他の民宿・ペンション・ホテル等に広まって少しずつ増えて行けばいいなあ・・・と妄想しています。



老若男女、全員集合！

◆古道・芦ノ田峠のフットパス地図づくり

◆芦ノ田峠フットパスのポイント

海老沢秀夫

5月15日(土)と6月20日(日)の2回、「芦ノ田峠」フットパスの地図を作るためのコース調査をおこなった。

5月は主に、コースを地図上に確定することを目的に歩いた。岐阜県飛騨市山野村で「鎌倉街道」の再生を計画している上平隆憲さんがGPS持参で参加、地形図上にルートを落としてくれた。感謝。

そして6月、上平さんのルート図などをもとに、コース沿いの様子を記録しながら歩いた。

芦ノ田峠フットパスで、ポイントになりそうなものをあげてみると…

- ① 青木沢集落からの谷川岳の眺め
- ② 武尊川溪谷とトチノキなどの溪畔林
- ③ 峠ちかくの「芦ノ田湿地」
- ④ 峠近くの共有林の伐採跡
- ⑤ いにしへの道しるべや祈りのための石造物
- ⑥ 美しいブナの二次林やトチノキの群落

特に、峠の名前にもなっている「芦ノ田湿地」は重要。かつて水田として使われていた湿地が放置され、ふたたび湿地にもどったものだ。アシ(ヨシ)が一面に繁っているが、部分的にミズゴケ類やモウセンゴケ類など「高層湿原」の植物も生えていた。ピンク色の美しいランが咲いていて、思わず「あ、サワラン」と言ってしまったが、草野さんが指摘してくれたようにトキソウのまちがいった。すみません、訂正です。それから、ミツガシワとかサワギキョウとか、花は咲いていなかったがユリの仲間(コオニユリ?)とかもあった。



上ノ原を乾燥地の草原とすれば、ここは湿地の草原。もっとたくさんの湿原植物があるはずなので、きちんと調べたいものだ。それから、上ノ原で重要な昆虫がチョウとするなら、芦ノ田ではトンボがポイントになる。これも要調査。水の出入りの様子も把握しておく必要があるだろう。芦

ノ田は、単なる田んぼ跡以上の貴重な場所だと思う。

峠ちかくのカラマツ林の伐採跡も大きな風景。切るために植えるのが人工林なのだから、「無惨な風景」などと言わずに、フットパス沿いにこんな場所があるのもまたよしとしたい。でも、青木沢集落の薬師堂復旧のために切ったにもかかわらず、その費用すべてをまかなえなかったとか、再植林する経費がでないので伐採跡は放置されるといった現実、日本の林業の現状を示

す一断面として特記しておきたい。

なお、森林の伐採跡地は草原の一種にほかならない。2〜3カ所、定点観測地を設けてモニタリングするのも意味あることかもしれない。いずれにしても私たちはこれで、上ノ原、芦ノ田、伐採跡地という3つの草原を「手に入れた」。また森林塾青水の作業が増えてしまいそうだ…。

◆芦ノ田峠フットパスの設定調査

有馬靖賀

お齡から想像するよりはるかにご壮健な有馬さん。古道を再生し活用するための活動にご参加いただき、フットパス地図づくりのプロセスを丹念に記録いただきました。(編集子)



5月15日は前日まで不安定だったことがうそのような快晴で、雪をかぶった谷川岳・朝日連峰が美しく、とても気持ちいい日でした。

高速道で事故渋滞に巻き込まれた自動車組を待って、午前の作業は割愛し、昼食を摂り、青木沢集落へ向かいました。今日は設定済みの青木沢峠フットパスに続く、芦ノ田峠フットパス設定の調査です。最終的には全てのフットパスを繋ぎ、健脚から初心者まで多様なコースを提供するそうです。満開の花桃越しに雪の谷川岳が絶景で、カメラの列が敷かれました。《標高820m?》参加者は学生会員二人を含む12人、海老沢秀夫さんの作業説明のあと、藤原案内人クラブ会長の林親男さんに従い先へ進みました。



既に地元の人の手で入口の標識が設置されており、杣道のような急坂の古道を進みました。倒れた石像を起こし、武尊川の畔に出ると手作りの橋と階段が現れます。《標高770m?》降雪と増水で壊れた手すりを修理し、階段を上るとちょっとした平地が開けました。《標高780m?》昔集落があったのか祠や庚申塔があり、ここで暫く林さんから昔の姿や由来の説明を受けました。庚申塔の側面には十字のような彫りがあり、隠れキリシタンの存在も考えられるけど、詳細は不明だそうです。神社参道の跡らしく、道標や短距離ですが杉並木もあります。

すぐに重機で均された道に出て、周囲の林相を調査し

ながら芦ノ田へ向けて登ります。この道は台風で壊れた薬師堂再建に充てるため、カラマツの人工林を伐採するのに通したものだそうで、芦ノ田峠には伐採した樹木を降ろすための索道も準備中でした。芦ノ田には湿地が残っており、カエルの鳴き声も聞こえました。《標高830m?》湿地は小さくなっているけど、カラマツを大量に伐採したので、そのうち回復するかもしれないそうです。高いところにはブナの林が残されていました。途中でもときどき立ち止まって説明を聞き調査もしましたが、芦ノ田でもしばらく滞在したので、芦ノ田峠《標高840m?》を越える頃には16時ごろになってしまいました。

芦ノ田峠からはずっと下りの坂道で、途中に白炭を焼いた石窯の跡がありましたし、出水で壊れた道を補修したとみられる石積みも見られました。坂道を下りきったところが平出の登山口、ここにも標識が設置されています。《標高710m?》また、藤原湖に水没した集落から移したという、百観世音の石像が20体ほど並んで、山桜の花びらを受けていました。

今日の作業はここまでで、車を回送して貰って青木沢経由でロッジ「とんち」へ、3時間余でも疲れのない調査が終わりました。これまでも草原の整備、茅刈りなどで森林塾と地元の方々の協力体制を体感してきましたが、標識や橋の架設、案内人クラブの開設など、一層の一体感を認識させられた一日でした。

翌日は少し雲がかかっても晴天で快適な中、茅原周辺の林相調査と伐採した木の集積でした。茅で滑る急坂を登り、草花の観察や糞コロジーなど変化に富んでいました。



◆「会員・会友」コーナー

◆エコポイント寄付のお願い

事務局

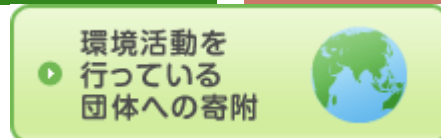
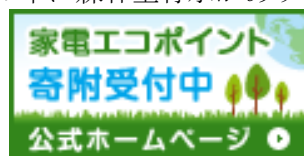
・環境省・経済産業省が推進しているグリーン家電・住宅エコポイント事業の環境寄付対象団体に当塾が採択されました。7月1日からグリーン家電と住宅エコポイントの寄付をすることができるようになりました。

エコポイント交換リストに「環境活動をおこなっている団体」として森林塾青水が掲載されています。

インターネットからですと、下記のホームページの環境活動を行っている団体への寄付

→自然保護・生物多様性保全団体

の中に森林塾青水があります。



皆さんエコポイントを受け取った場合は、是非、森林塾青水にご寄付ください。よろしくお願いします！

◆古民家再生奮闘記 その③

北山郁人

2009年3月までは、奥多摩に住んでいたのも、毎月1回1週間～10日ほど藤原に来て、古民家再生活動を行いました。その間、様々な体験がありました。長男の誕生日には、見事な満月の下でお月見誕生会！家の前の湧き水に自生するクレソン、散歩に行けば道端に転がるくるみや、山栗。川には岩魚もいて自然からの贈り物をおいしくいただきました。

そして何より、素晴らしい体験は「茅刈り」。私たちが藤原に移住するきっかけも、森林塾青水の活動に参加したところから始まりました。今では数少ない茅場。春には野焼き、秋には茅刈りが行われます。皆が協力して行うそこでの作業は、誰もが思い描く日本の原風景とでもいうべきものです。いずれは、うちの屋根もこの茅を使って吹き替えができるでしょうか？





さて作業はいよいよ床を張る段階へ。その前に、床下からの湿気を防ぐために、ビニールを敷きコンクリートを打ちました。3 m³のコンクリートを練るのには、さすがに人力への限界を感じてセメントミキサー車を頼みました。材木は床板の加工を自分ですることにし地元から安く調達。この頃になると、冬の足音を感じ始めました。搬入された材木を乾燥させるためにも、雪が降る前に家の中に移動する必要があり、大工さんにもお手伝いいただいて急いで床下を仕上げました。



遠く朝日岳に初雪が降る頃、大切な作業がひとつ。そう雪囲いです。かつてこの地は5mもの雪に覆われていたそうです。時折通うだけで除雪できない心配もあり、今年はいくつもの雪になるのか、と想像しながら初めての雪囲いを家の全周にしました。冬の間、屋根に積もった雪

は、時折雪崩のような轟音と共に落ち、家はかなりの震動に襲われ、雪の脅威を感じました。が、雪囲いのおかげで家は無事でした。ほっ。



約3週間ほどあいて11月末に久しぶりにみなかみへ。藤原に向かう山道で、角をまがったその先に突然雪が現れました。ここからか！と改めて奥深い土地であることを実感しました。雪が深くなる前に少し家の周辺を片付けました。前借主の置き土産が大量のゴミとなり、トラックで搬送することに・・・反面、石油ストーブがいくつも残されていたのでそれらはありがたく使わせていただくことにしました。が、とりあえずは大量にでた廃材を薪



にする手はない！ホームセンターで安いだるまストーブを購入。玄関前に煙突の穴もしっかりあいていたので、ブロックを敷き詰め設置しました。室内の中央一面に敷き詰めた床板はまだまだ水分を含んでいてかなり重いので、天井近くにあがる薪ストーブからの熱を、扇風機とダクトを使って床下へ送り、

床板の乾燥を促進&暖房効率を上げることにしました。



床板を張り終えた奥の部屋に生活拠点を移し、中央部分で床材の乾燥&加工、囲炉裏のあった今までの滞在部屋の床下作業と進みました。今までの滞在時のせまい空間から、一気に広がって子どもたちは走り回って喜びました。

年末は長男と二人きりの滞在。彼は一人たくましく、乾燥中の揺れ動く床板の上で、一番暖かい場所をちゃんと探して、がつつ食事を取っていました。環境の変化に即対応！子どもはたくましくどんどん成長していきます。

お正月は毎年実家に帰るので、しばしみなかみから離れました。その間、やはり心配していたことが起きました！新年初の滞在。到着するや否やびっくり仰天！なんと雪で家はすっかり覆われ、玄関は一体どこに？！子供たちを車内に残し、なんとか一本の道を作りようやく中に辿り着くことができました。結局今年の冬は雪が少なく、こんな大変な思いもこの一度きりで済みました。(その③了)



○野焼きは女人禁制だった？「藤原に嫁に来て初めて野焼きを見せてもらって嬉しかった」。娘さんに手を引かれて、ひ孫さんたちと一緒に野焼きを見学された吉野かつみさん(84歳)のお言葉。雪間に火を入れるのは男衆の仕事で、女子衆が茅場に入ったのは蕨や山菜採りぐらいだったのかもしれない。男女平等にくわえて少子高齢化の現代。老若男女、地元も流域市民も外人さんも入り会ってやる。それが、藤原の今の野焼き。

7年前、およそ40年ぶりに再開して以来ずっと安全第一を旨としてきた。今年も7年連続無事故の記録更新ができた。これからも、火入れ講習会をふくめ技術をしっかり伝承しギネスブック入り(!)を目指したいものだ。



○万葉集ではサクラよりススキが人気上位！万葉集には4500首以上の歌が収録されていて、植物を読み込んだものが多く160種以上が登場しているらしい。日本人好みの代表みたいに思われているサクラは意外と少なく20～30首。当時はウメ(確かでないが120首?)の方に人気があった、とも聞いていた。

岡田幹事のお調べによるとススキの類は71首。(3頁参照) ハギ、ススキ、キキョウ、オミナエシといったススキ草原の仲間を加えれば、万葉の時代の人気ランキングはススキ軍団>ウメ>サクラの順ということになる！



そういえば、吉野一幸さんのご寄稿文に「今のゴルフ場の辺りは、昔は草原で季節の花が群生していて、カップルのデートスポットだった。上ノ原はその頃の若い人たちの憧れの場所で・・・」という大阪のお婆様の懐古談が紹介されていた。明治・大正のころ、国土面積の15～30%を占めていたといわれる草原。『ウサギ追いし彼の山・・・』と歌い親しまれてきた舞台は草原、日本人の心の原風景であつたに違いない。

○タイプの違う3つの草原 昨年、青木沢峠のフットパス地図が出来あがった。次は芦ノ田峠ということで、5月6月と連続して皆で歩いた。峠近くの道沿いに、元は3枚ほどの田んぼだったという湿地が残っていて、トキソウの楚々たる花に出会った。聞けば絶滅危惧種の由。

それはさておき、湿地に普通にあるべき草花が普通に見られる状態が貴重な今の時代。何とか、この湿地を維持したいもの。我等が誇る海老沢学監のお見立てによると、上ノ原が乾燥地の草原であるのに対して芦ノ田は湿地の草原。そして、芦ノ田峠沿いに残ったカラマツ人工林の伐採跡地という草原。気が付いたら、我々が通い手の届く範囲内に3つのタイプの草原を手に入れてしまった、という次第。(7頁参照)

こんな贅沢な話は滅多にない。それぞれが持つ生き物の多様性と固有の原風景を大切にしながら、末長く保全していきたいものだ。



○エコポイントで学生部の活動に弾みを！ グリーン家電と住宅エコポイントの環境寄付対象団体に当塾が採択された。(1、8頁参照) 立派な財団やNPO法人でもないのに、よくもご指定いただき嬉しい限り。だが、実際にご寄付がいただけないと文字通り「採らぬ狸の皮算用」に終わってしまう。まずは、我々会員自身が「魁より始めよ」であろう。そして、狸がたくさん捕れたら初めてその使い道を考える。これから増えるであろう、学生部の皆さんの活動参加費の軽減に資したい。そんな、夢が実現すると本当に嬉しいのだが・・・。

○日本型「コモンズ」再生への期待 三井昭二先生が近著『森林社会学への道』第1部4章のなかで、当塾の活動をご紹介下さった。(1頁参照) 日本の里山活動において重要なのは、地域住民と「よそ者」という空間的つながりと、伝統的ムラ社会による林野利用と「よそ者」による現代的な林野利用とのつながりである。そして、このような二つのつながりを志向する「青水」の活動には、イギリスのニュー・フォレストにも匹敵するような日本型の「コモンズの再生」を期待している、と結んでおられる。

昨年末から取り組みを始めた「利根川流域コモンズ」形成のための活動を貫徹せよ、との励ましのお言葉をいただいたものと受けとめたい。

もろもろの山草おのおの花つけて

言葉をもためそのやさしさよ

鹿兒島寿蔵

(青)

草原再生セミナー 2010年第2回東京楽習会

流域市民が支える利根川水源地の草原 ～多面的価値のある草原を持続的に保全する仕組み～



首都圏の水がめ、利根川源流の群馬県みなかみ町藤原集落は今や過疎、少子高齢化の極みにあり、限界集落直前の状態で、廃村も危惧される危機的状態にあります。東京の水の8割を供給する利根川水系は、流域住民にとって、「生命の水」のふるさととも言うべき生命維持基盤であり、その源流域に存する藤原集落の自然・環境資源は共通の公益的財産(コモンズ)です。その藤原集落の元入会地であった草原を持続的に利用・管理するにはどうすればよいか。流域市民の皆さまと一緒に考えます。

開催日時 7月24日(土曜日)

10時10分～11時50分 受付10時

**開催場所 環境パートナーシップオフィスエポ会議室
渋谷区神宮前 5-53-70 コスモ青山B2**

● セミナー内容

昨年度までに調査とりまとめた「多面的価値のある草原を持続的に保全する仕組みの構築」の内容、群馬県みなかみ町・藤原地区の状況、上ノ原入会の森の生物多様性、ススキの利用可能性、生態系サービスと評価、持続的管理・運営の仕組みの構築、についてご紹介します。

● セミナー講師 **海老沢秀夫** 森林文化協会 グリーンパワー編集長 (森林塾青水幹事)
浅川 潔 コミュニティデザイン 代表 (森林塾青水幹事)

● 定 員 40名 (申し込み順受付)

● 参加費 無 料

● 懇 親 会 閉会后 自由参加 場所未定

申込期限 7月22日

■ 申込み・問合せ先

森林塾青水 事務局 コミュニティデザイン気付

http://commonf.net

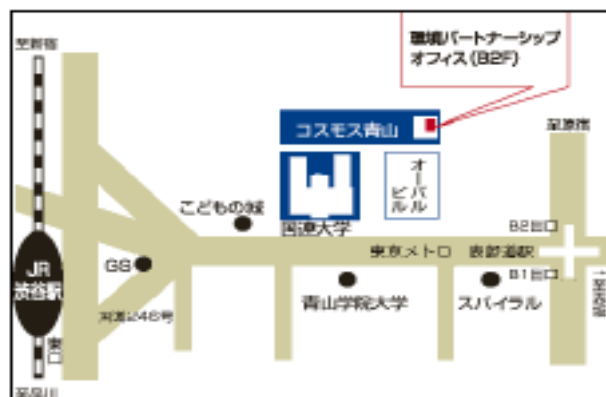
E-mail: info@commonf.net

TEL: 03-6228-3503 FAX: 03-6228-3504

ファックス又は参加申込書の内容をメールでお申込み下さい。当日連絡先090-9292-6781(担当幹事 稲)

● 交通: 東京メトロ(銀座線・半蔵門線・千代田線)

表参道駅B2出口徒歩5分



主 催 森林塾青水

このセミナーは地球環境基金の助成を受けて開催されます

送信先

E-MAIL info@commonf.net

FAX 03-6228-3504

森林塾青水 事務局 宛

草原再生セミナー 2010年第2回東京楽習会

流域市民が支える利根川水源地の草原 ～多面的価値のある草原を持続的に保全する仕組み～

参加申込書

申し込み期限 7月22日

氏 名	
住 所	〒
電話番号	
FAX番号	
E-MAIL	
所属団体	
連絡事項	



草原再生フォーラム

予告案内

「上ノ原は人と生き物の入会地」
—暮らしの現場から生物多様性の保全を考える—



10 月 23 日 (土曜日) フォーラム・エクスカーション・交流会

10 月 24 日 (日曜日) 茅刈り「講習会・茅刈り検定会」

●会 場 ・フォーラム：オリ根温泉ホテルサンバード

群馬県みなかみ町藤原 4957-1 TEL0278-75-2321

・交 流 会 ： オリ根温泉ホテルサンバード

・エクスカーションと茅刈り「講習会・検定会」： 上ノ原「入会の森」

●フォーラムの内容

・開会挨拶 原 剛 (早稲田大学特命教授・早稲田環境塾塾長・森林塾青水最高顧問)

・報告提言 海老沢秀夫 (森林塾青水幹事・森林文化協会グリーンパワー編集長)

「上ノ原は人と生き物の入会地—持続的保全の仕組みを考える」

・基調講演 朱宮丈晴 (日本自然保護協会保全研究部長)

「生物多様性の 10 年 —地域の保全活動がみんなの暮らしを支える—」

・情報提供 全国草原再生ネットワーク理事

「我が国における草原と保全活動の状況—森林塾青水の取組みの特色と期待」

●タイムスケジュール・フォーラム

23日：14時～16時

・エクスカーション(上ノ原「入会の森」)

23日：昼食前後

・茅刈り「講習会・検定会」

24日：午前中

●会場への送迎 上毛高原駅 10 時 20 分発 水上駅 10 時 40 分発 (無料)

●参 加 費 1 泊3食付き：12,000 円 (下記の料金含む)

(日帰り参加) (フォーラム：無料 エクスカーション：500 円 交流会費：3500 円)

(茅刈り「講習会・検定会」(昼食付)：1500 円)

主催 森林塾青水 共催 早稲田環境塾

後援：みなかみ町、みなかみ町藤原区、藤原案内人クラブ、全国草原再生ネットワーク、森林文化協会、自然保護協会、文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議 他

このフォーラムは地球環境基金の助成を受けて開催されます

■申込み・問合せ先

森林塾青水 事務局 コミュニティデザイン気付

TEL：03-6228-3503 FAX：03-6228-3504

E-mail：info@commonf.net <http://commonf.net>

ファックス又は参加申込書の内容をメールでお申込み下さい。

申込み期限 10月1日

送信先

E-MAIL info@commonf.net

FAX 03-6228-3504

森林塾青水 事務局 宛

森林塾青水 10 周年記念フォーラム

草原再生フォーラム

参加申込書

申込み期限 10月1日

氏 名	
住 所	〒
電話番号	
FAX 番号	
E-MAIL	
所属団体	
フォーラム	参 加 ・ 不参加 (どちらかに○してください)
エクササイズ	参 加 ・ 不参加 (どちらかに○してください)
交流会	参 加 ・ 不参加 (どちらかに○してください)
茅刈り 講習会・検定会	参 加 ・ 不参加 (どちらかに○してください)
交 通	電車：上毛高原駅・水上駅 自家用車
連絡事項	

※今後、上記の連絡先に森林塾青水からイベント等のご案内をお送りすることがあります。